

ノンテリトリアルオフィス

伊藤 克也, 清水 祐希

Katsuya ITO, Yuki SHIMIZU

1 はじめに

対向島型のオフィスが、日本では一般的なオフィスレイアウトとして定着している。対向島型とは、向かい合った机の集合が一つの島を形成しているオフィスレイアウトを指す。対向島型オフィスを採用する要因として、デスクが部署毎に分かれ、そのグループ内で行動管理および流れ作業が行いやすいことが挙げられる。

しかし、OA 機器の導入、会社全体のネットワーク化により、社員の相互作用を必要としない定型業務から、部門を超えて連携するプロジェクト業務へと変化している。それに伴い、執務内容も単純作業から、知的作業に変化している。そこで、対向島型オフィスに代わるオフィスレイアウトとして注目されているのが、執務の領域を限定しないノンテリトリアルオフィスである。

2 ノンテリトリアルオフィス

2.1 ノンテリトリアルオフィスの概要

ノンテリトリアルオフィスとは、オフィス内のデスクおよび設備、スペースを個人に割り当てず、複数人で共同利用するオフィス形態である。ノンテリトリアル化の概念図を Fig.1 に示す。

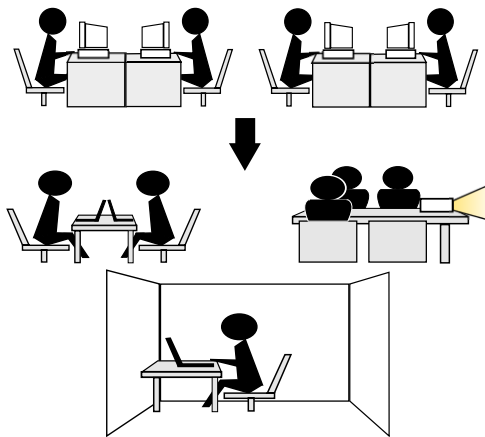


Fig.1 ノンテリトリアル化の概念図

図のように、執務スペースだけでなく、共用作業スペースおよびリフレッシュスペース等多様な空間が職場となる。多様な空間を適宜活用することにより、分野を超えた出会いが生じ、コミュニケーションの促進に繋がる。コミュニケーションは、アイデアを生むきっかけとなる。ノンテリトリアルオフィスは、1970 年代に提唱されたオフィスコンセプトであり、組織内のコミュニケーションや情報共有を促進するために、オープン化（パーティショ

ンの撤廃）と自由席化（固定席の撤廃）を行っている¹⁾。知的作業が増え、プロジェクト業務に注目が集まっているため、コミュニケーションの促進に有効なノンテリトリアル化を進める企業が増えている。

2.2 ノンテリトリアルオフィスの利点

ノンテリトリアルオフィスの役割は、組織の横断的な繋がりを強めることにある。多様な空間は、分野を超えた出会い、そしてコミュニケーションを生じさせる。コミュニケーションはアイデアや閃きを生じさせ、知的生産性を向上させる。プロジェクト業務の重要性が増している中、執務者の知的生産性の向上は重要である。

また、ノンテリトリアル化に付随した利点として、気分に応じて自由に席を選択できる点とデスク上の整理整頓が挙げられる。ノンテリトリアルオフィスは自由に多様な空間から席を選択できるため、リラックスおよび気持ちの切り替えを行いやすい。リフレッシュによるストレスの軽減は知的生産性の向上に繋がる。また、デスク上に私物を溜めこむことができないため、整理整頓ができ、重要書類の紛失防止になる。また、多くの書類を持つと毎日の整理整頓に手間がかかるため、ペーパーレス化の意識にも繋がる。

2.3 ノンテリトリアルオフィスの課題

ノンテリトリアルオフィスによる利点が注目を集める中、課題も生じている。

一つ目は選択座席および同席者の固定化である。選択座席の固定化とは、特定の執務者が常に同じ席に座ることにより、他の執務者の座席選択の自由度を低下させる問題である。同席者の固定化は、常に同じ集団で近くに座ることにより、横断的なコミュニケーションを阻害してしまう原因となる。

二つ目はセキュリティである。ノンテリトリアルオフィスでは、部署の異なる初対面の人の隣で仕事することが珍しくない。しかし、その人が同じ組織に属する人間であるか確かめることができない。よって、情報漏洩の可能性が生じる。

三つ目は執務者の行動把握および連絡方法である。席が固定でないため、社内のどのスペースで働いているかを特定することが容易でない。ノンテリトリアルオフィスは、横断的なコミュニケーションを促進を目的としているが、かえって従来行えたコミュニケーションを阻害させる可能性がある。

ノンテリトリアルオフィス化を行い、従来行えたコミュニケーションを阻害させてしまえば、知的生産性の向上を阻害する可能性がある。ノンテリトリアルオフィス

の利点を享受しつつ、課題を解消していくことが必要であると考えられる。

2.4 解決策

座席及び同席者の固定化の問題を解消するために、ノンテリトリアルオフィスの研究を行っている同志社大学の知的システムデザイン研究室では、配席ポリシーを利用した研究が行われている。執務者をランダムに配席させることにより、執務者間の交流を可変化させ、より効果的にコミュニケーションを促進させる。さらに、前回と同じ座席および前回と同じ集団の近くに配席しないという配席ポリシーを付与させることにより、固定化を禁止させることが可能になり、座席及び同席者の固定化を解消することができる。

また、社員の行動把握を行えるようにするコミュニケーションシステムの開発も進められている。コミュニケーションシステムの例として、Microsoft Lync が挙げられる。Microsoft Lync は、様々なコミュニケーション手段を統一的に扱うことができる統合コミュニケーションシステムである。オフィスで業務上の連絡をネットワークを通して行うことを想定しており、音声通話およびインスタントメッセージ、会議等の機能を持つ。Microsoft のアプリケーションとの統合が可能であり、更なる生産性の向上に繋がる。以下に、Microsoft Lync による接続概念図を Fig.2 に示す。

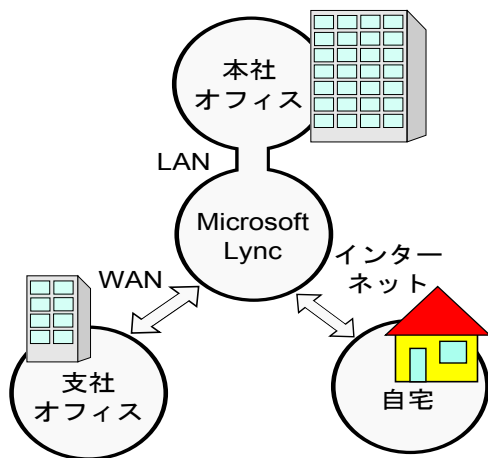


Fig.2 接続概念図

ネットワークを用いて、あらゆる状況下で連絡を取り合うため、ノンテリトリアルオフィスにおいても、目的の相手と連絡をとることができる。また、Microsoft Lync は、アクセスポイントから割り出した在席情報を保持しているため、相手の状況を把握することもでき、ノンテリトリアルオフィスの課題を解消する役割を果たす。つまり、コミュニケーションシステムと共にノンテリトリアルオフィスを導入することは、より快適なオフィス環境を生み出すことに繋がる。

3 ノンテリトリアルオフィスの導入事例

日本マイクロソフト株式会社は、2011年2月1日付で品川グランドセントラルタワーに移転した際に、オフィスの60%にノンテリトリアルオフィスを採用した²⁾。執務スペースとして、デスク、ボックスシート、カフェ等が用意されており、仕事内容や気分に応じて好みの場所を選ぶことができる。各フロアには、部署毎の一体感を保つために設置されたコミュニケーションスペースがある。日本マイクロソフトは部署内外両方のコミュニケーションを促進させるオフィスである。他にも、守秘性の高い業務に取り組むための個室もあり、セキュリティ対策もされている。

また、日本マイクロソフトは、情報漏洩の危険の高いノンテリトリアルオフィスを考慮し、マイクロソフト製品を活用した来客管理システムを導入している。システムの概要図を Fig.4 に示す。

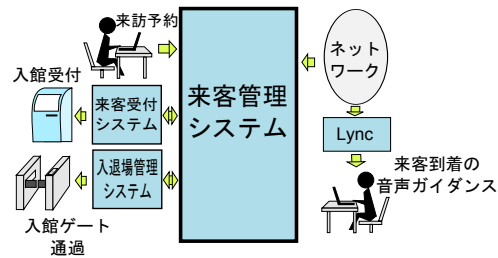


Fig.3 来客管理システム

入館ゲートとの連携により、来訪者の入館を管理している。物理的セキュリティを向上させ、入館者を把握することにより、情報漏洩の危険を抑えることができる。同時に、来訪予約から入館までのシステム化により、ストレスの軽減および業務の効率化を図っている。

4 今後の展望

知的生産性の向上が期待されるノンテリトリアルオフィスであるが、情報インフラの整備状況によっては全てのオフィスにおいて導入が成功するとは限らない。ノンテリトリアルオフィスが広くオフィスに採用されていくには、コミュニケーションシステムの発展およびコミュニケーションシステムを導入したノンテリトリアルオフィスにおける研究の蓄積が必要不可欠だろう。今後、ワークスタイルに応じたオフィス形態、システムの開発および導入が進むと予想される。

参考文献

- 1) 稲水伸行. ノンテリトリアル・オフィス研究の現状と課題—文献レビューによる成功条件の模索—. 2008.
- 2) 日本マイクロソフトが品川新オフィスで実現した次世代ワークプレイス

<http://www.microsoft.com/ja-jp/business/enterprise/cp/shinagawacase/default.aspx>